

第1回：地名の会紹介 辻堂の名前の由来 発展の推移（除く古代・中世）

まず私どもの会の紹介をさせていただきます。

「藤沢地名の会」は今年で丁度35年目を迎えました。現在160名余の会員がおり、地名を通じ藤沢について多くの市民の方々と共に郷土の歴史や民俗、文化遺産などを学び、訪ね、ふるさと意識の啓蒙を図ろうと、講演会や映画会、そして市内を約5年で一巡する地名探訪などの活動しております。また、年3回の講演会の結果を会報に掲載して市内の図書館や公民館で一般の方にも配布しております。其のほか会員限定ですが県下の各地をめぐる“さがみ探訪”や古文書の勉強会なども実施しております。

まず、辻堂の地名の由来からです。

辻堂は平塚の花水川から片瀬川まで海岸沿いに続く約13キロメートルの湘南砂丘の一部にあります。奥行き約5キロメートルの間は砂丘列とその間の湿地とからなり、しかも東の鶴沼との境をなす引地川はよく氾濫を起し、決して農業に適した土地ではありませんでした。しかし西から鎌倉への近道として鎌倉道が通ることから、砂丘の真ん中に半農半漁の集落が開け、また真言宗のお寺が村の中心に二つ出来、光明真言道場には大山詣の帰りに江の島に行く人々などが集まり、信仰の道などが四方に広がるようになってきました。

もともと砂丘の小さな山とそのあいだの湿地帯だけで、小山には松の木が育ち、集落の中に残された地名は、貝殻山・うしろ山・チョンボリ山・池田・ヨシイケ・ガル池・松ヶ谷（や）などで、その中で街道筋の辻にある真言道場などのお堂が目立ったことから辻堂の名がつけられたのではないかと云われます。

「辻堂」と云う地名が初めて文献に登場するのは 鎌倉幕府滅亡直後の中先代の乱の記録ですが、鎌倉が開けた頃から歌や物語には、この辺りを「やつまつが原」八つの松、転じて沢山の松の原とか、また八つの的、弓などの的ですが「やつまが原」「やまが原」などと記されています。鶴沼を「とがみが原」、平塚西部を「もろこしが原」等と呼び、これらと共に砂丘地帯につけられた名前です。

人家はまず鎌倉道沿いから東西に広がり、段々南北に伸びたようですが、湘南砂丘の東を占める辻堂や鶴沼辺りは茅ヶ崎地域のように砂丘列が海岸線と平行でなく、片瀬丘陵が影響して北東方向に延び、藤沢道や羽鳥道の道筋も北東に伸びているのが一つの特徴です。また鎌倉道は東南に下がるため砂丘列を上り下りしていたようです。街の中心の四ツ角も斜めとなり、道の両側にヒガシッコ、ニシッコ、ミナミッコ、キタッコと呼ばれる町作りがなされました。



辻堂街の中心 “四ツ角”

辻堂地区は全域が6000年前の縄文海進期以降徐々に陸地化されたところに発達した町で、

遺跡は最北部の城南・神台^{かんだい}など早く砂丘が安定した所から、やっと、縄文後期の遺物が発掘される程度で全く新しい土地と云えます。

現在辻堂地区は真ん中を通る東海道線で二分され、南部が辻堂市民センター・公民館の管轄、北は明治市民センター・公民館の管轄となっており、北部には旧東海道が通り、大山参詣道などがありますが、今回の放送では南部を中心に史跡を訪ねます。

次に、**辻堂の生い立ち** についてお話し致します。辻堂は平安後期に開発された大庭御厨に所属し、鎌倉時代には武士や文人の通過した所ですが、やっと、後北条氏時代に羽鳥と共に御馬廻衆 関兵部丞の知行とされた資料があります。以後、江戸時代を通じて村の石高は265石程度と変わりませんでした。江戸初期に御料地すなわち天領から始まり、旗本知行地になり、宝暦12年（1762）には全て幕府の御料地とされました。詳しくは次回第二回で説明します。

享保13年（1728）から辻堂海岸が片瀬山等と共に幕府の砲術調練場とされ、明治になると砲術調練場は辻堂の部分だけ海軍演習場となりました。大正5年には地元の強い熱望と費用負担により国鉄の辻堂駅が開設されました。海軍演習場が解除されたのは昭和34年で丁度藤沢が工場誘致、住宅開発に乗り出した時期に当たります。以降の跡地の活用には公団辻堂団地、湘南工科大学、県立辻堂海浜公園、辻堂浄化センターなどが建てられるとともに国道134号線の直線化や拡張など、更に来年を目標に辻堂市民センター・公民館の移転計画が進められています。

明治9年170世帯、1102人の辻堂は、明治22年に大庭・羽鳥・稻荷を合わせ明治村となり、明治41年に藤沢町（ちょう）に合併しました。現在南部だけで約1万9千世帯、4万4千人の大住宅地域となりました。